

### 廃用症候群を認めるTAVI施行患者に,早期より整容動作を中心に介入した一例 —意志質問紙(Volitional Questionnaire;VQ)を用いて— Case report of an early postoperative TAVI patient with disuse syndrome: Grooming training based upon the VQ score

○窪田恭子 (OT), 吉田千花 (PT), 清水雄太 (PT), 高田順子 (PT)  
東京ベイ・浦安市川医療センターリハビリテーション室

Key words: 動機づけ, 早期作業療法, 有能感

【はじめに】 廃用症候群を認める経カテーテル大動脈弁留置術(Transcatheter Aortic Valve Implantation;以下TAVI)を施行した事例に対し,術後早期より作業療法を開始した.本事例は,TAVI術前に約1か月間の床上安静が続いたことにより破滅的変化を経験し,作業有能性の低下を認めた.そこで,意志質問紙(Volitional Questionnaire;以下VQ)を用いて興味や価値を評価し,本事例の意志が最も高い水準で観察された整容動作を中心に作業療法を展開し,内発的動機づけを促した.以下に評価,介入方法,考察を報告する.なお,発表に際して事例およびその家族に同意を得た.

【事例紹介】 独居でADL・IADLは自立していた70代の女性.若い頃より,活発に外出をしていた方である.前医にて,子宮摘出術後に,急性心筋梗塞を発症し経皮的冠動脈形成術(PCI)を施行したが,大動脈弁狭窄症と頻拍性心房細動にて循環動態が安定せず,約1か月間の床上安静が続いた.その後,大動脈弁狭窄症に対する根治治療を目的に当院へ転院し,TAVIを施行した.

【初期評価】 術後2日目より作業療法を開始した.人工呼吸器管理中であったが,理解は短文の指示であれば可能で,表出は頷きで応答していた.しかし,自発的な意志の表出はなく,具体的な作業のニーズは明らかでなかった.術後3日目に人工呼吸器を離脱し,VQを施行した.VQスコアは整容39点,四肢運動19点,離床14点であった.四肢の粗大筋力はMMT2-で,基本動作やADLは自発的な活動がほぼみられず,ベッド上にて全介助の状態であり,Barthel Index (以下;BI) は0点であった.

【介入方法】 初期評価のVQスコアを踏まえ,早期より整容動作練習を中心に作業療法を展開した.練習中は探索から達成までの連続体を通して,事例とともに遂行状況を振り返りながら,約3週間の介入を継続した.

【結果】 術後25日目,VQスコアは整容49(+10)点,四肢運動34(+15)点,離床29(+15)点に改善した.基本動作は,端座位見守り,立ち上がり中等度介助まで介助量が軽減した.ADLはBI:30点まで向上し,整容動作は入院生活において習慣化された.その他に「お茶碗が持てた」「少し立てるようになった」という発言が聞かれ「できる」と思う気持ちの表出頻度が増えた.

【考察】 VQは,認知障害によって意志の自己報告ができないクライアントを客観的に評価する方法として開発された.知的障害,精神障害,認知症,失語を持つクライアントに適用できると報告されているが,術後早期に使用した事例報告は少ない.術後早期では,患者が身体機能や環境の急激な変化に適用できず,介入時に具体的な作業のニーズが表出されない状況に遭遇する.本事例も例外ではなく,加えて破滅的変化の経験により自己能力の判断や自己への深い洞察は困難であり,認知機能は保たれていたが生得的ニーズを自ら語れない状態にあった.そのため,本事例が最適に意志を表出する条件や,意志の肯定的な発達を促す方法を明らかにすることを目標に,VQを評価スケールとして使用した.VQスコアで最高得点の整容動作を選択し,意志の段階を評価しながら作業従事に焦点化した作業療法を展開したことは,本事例の作業同一性を再構築し,それに応じた有能性の改善や自己効力感の向上に有効であった.さらに,整容動作は,本事例の有能感に働きかけることになり,整容動作以外の意志の向上にもつながったと考える.